

東京国立近代美術館工芸館名品展 陶磁いろいろ



ルーシー・リー 《ピンク象嵌小鉢》 東京国立近代美術館蔵
Estate of the artist

特別陳列 加賀蒔絵の世界

特別陳列 百工比照Ⅱ

■ 棚の美【近現代工芸】

■ 優品選【近現代絵画・彫刻】



重文《秋野蒔絵硯箱》 五十嵐道甫
—加賀蒔絵の世界より—

加賀蒔絵の世界

11月11日(土)～12月17日(日) 会期中無休

十七世紀の加賀蒔絵は、そうした極めて長い伝統の延長線上に位置付けられます。蒔絵には金が多用されるため、独特の華やかさがありますが、その金により侘びた風情を醸し出す美意識も十六世紀の桃

塗装も意味するようになりました。紀以降西欧に輸出され、多くの需要が開拓されたことで、英語のジャパンは漆や漆器、そして漆のような高度な蒔絵の技法が確立しています。さらに十六世紀以降西歐に輸出され、多くの需要が開拓されたことで、英語のジャパンは漆や漆器、そして漆のような

興を造形化する理想的な媒体とも言えます。今回展示する作品には、そのような勘所を心得た優品が多く見られます。前田育徳会尊經閣文庫分館の特別陳列「百工比照」と是非あわせてご覧いただきたいと思えます。



重文《蒔絵和歌の浦図見台》 伝清水九兵衛
江戸17世紀



《蒔絵協息文十二律箱》 五十嵐派
江戸17世紀

学芸員の眼

加賀蒔絵の特徴として、絵画的な表現が挙げられます。五十嵐道甫に代表される五十嵐家は、法華宗のネットワークにより、本阿弥家と血縁関係があります。そして本阿弥家は、金工の後藤家を介して狩野派と姻戚関係にあるうえに、俵屋宗達とも深い関わりがあります。このような背景を考えると、道甫につながる五十嵐派の蒔絵が絵画的特質を持つことにも必然性があるといえることができます。しかし、五十嵐派の様式には狩野派や琳派とは異なる独自性があり、それは材質や技法の持ち味を最大限生かすという姿勢によるものと考えられます。もちろん、尾形光琳の例のように蒔絵の図案には専門の画家も関与したことでしょう。そこで、彼らが図案とともにどのような本画を描いていたのか興味深いところです。

今回は、加賀蒔絵を代表する作家、五十嵐道甫と清水九兵衛の競演が大きな話題となっています。そして、それぞれ重要文化財に指定されている道甫の《秋野蒔絵硯箱》と伝九兵衛の《蒔絵和歌の浦図見台》を独立ケースに展示することで、近くからご覧いただける点も見所です。日本の気候風土が漆の生育に適していたこともあり、縄文時代から人々は深く漆に関わってきました。そして、奈良時代には極めて

山時代には浸透していきます。そして、先に挙げた加賀蒔絵を代表する二点は、いずれも夜の風景をモチーフとしている点が改めて注目されます。夜は、古今東西のあらゆる芸術ジャンルのモチーフとなっていますが、それは、高名な哲学者が言ったように、夜は世界の深さに思いを致す時であるからかも知れません。それだからこそ、文学的感興も一段と冴え渡るのではないのでしょうか。蒔絵は、そうした感興を造形化する理想的な媒体とも言えます。

今回の「百工比照」の公開は、二〇一五年の「加賀前田家 百万石の名宝」展以来の規模となります。それ以前は、「加賀藩の美術工芸」と題した特別陳列の中で部分的に公開してきましたが、やはり体系的な観点から「百工比照」編集の根幹であることを考えますと、ある程度まとまりをもって展示することが、「百工比照」の歴史的意義を理解していただくうえで重要ではないかと思えます。

自然を芸術の師とする思想は人類に普遍のもので、ということができませんが、「百工比照」を俯瞰すると、それを自然界に存在するものと、自然を動かす根本原理の両面から見据えて考究する姿勢がうかがえます。たとえば、金属の量的変化が質的变化をもたら

すことを段階的に視覚化することをおして、自然の様々な成り立ちを類推することができるという具合に、「百工比照」には自然物と人工物を通底する法則性への視点があります。

加賀藩五代藩主・前田綱紀が推進した「百工比照」のプロジェクトは綱紀の在世中には完成されませんでした。しかし、そこには後世に託するという思いがあったことを忘れてはなりません。資料がそろわず空欄になっていく部分を見ると、このプロジェクトが極めて高邁な精神をもって着手されたことを痛感します。書物の収集や編纂作業と同時に、「百工比照」により人間の知的な営為の本質を終生問い続けた綱紀のこうした姿勢が、後世、学都金沢を形成していきました。

※当初、十二月二日に予定されていた土曜講座「前田綱紀『百工比照』の思想」は、九日に移動しました。あしからずご了承ください。

重文《百工比照》より第五号箱
第五抽斗 丸形双寿帯鳥釘隠

東京国立近代美術館工芸館は、二〇二〇年を目標に、石川県へ移転します。工芸館のコレクションをより多くの方にご覧いただくため、昨年に引き続き展覧会を開催いたします。今年も、「陶磁」分野にスポットを当て「陶磁いろいろ」を企画いたしました。

「やきもの」という言葉とともに親しまれてきた陶磁。その素材や技法は、工夫を重ねつつ、現在まで伝えられてきました。そこから生まれる表現は、今日、ますます広がりを見せています。

そんな出品作の中から、二点をご紹介いたします。初代宮川香山《色入菖蒲図花瓶》は、中間色を用いた釉下彩による表現が特徴的です。曲線的な形に合わせて青と白の菖蒲が配置され、その花や葉には細やか

な線で葉脈が描きこまれています。透き通るような磁器の上に施された柔らかなグラデーションは、植物の瑞々しさを感じさせます。

そして、形とカラフルな色彩が印象的な、重松あゆみ《骨の耳'96-1》。石で磨かれた表面は、触ればすべすべとしそうで、優しくつやめいています。「骨の耳」とは、谷川俊太郎の詩に着想を得たもので、作家の「五感以外のものを感じたい、骨で考え、骨で聞きたい」という意味がこめられています。

本展で、色、質感、形など、いろいろな表現された作品の中から、気になるものを探してみたいかでしょうか。会期中、ギャラリートークやタッチ&トークも開催いたしますので、ぜひご来場ください。



重松あゆみ 《骨の耳'96-1》
東京国立近代美術館蔵

第3・4展示室

優品選【近現代絵画・彫刻】

11月11日(土)～12月17日(日) 会期中無休

通常、第3・4・6展示室を使用している近現代の絵画・彫刻は、東京国立近代美術館工芸館の名品展を開催する関係上、第3・4展示室で優品をご覧いただきます。

日本画部門からは、二点の大作を紹介します。岡村桂三郎《伽楼羅07-2》は、杉板のパネルを燃やす。絵の具を削る、剥ぎ取るという凄まじい制作工程です。本作からは、絵の具や絵画の物質的な側面を感じとることができます。また日影圭《汎》は全長八メートルを超える作品です。こちらも日本画のイメージを覆します。どちらも「日本画とは？」と、問いかけてしまう作品です。

洋画部門の展示作品を何点かご紹介します。加藤安佐子の三枚組の《影》は、金沢の黒い瓦屋根の連なりをモチーフとしたもので、形の微妙に異なる三枚の画面に描かれた波線が、実にリズムミカルです。一方、

ブリキ板に油彩で描いた、これも三枚組の沢オイ《世紀の風 New wing》は、連結部と意図的にずらした部分が特徴的なダイナミックな作品です。そして、これも女性作家ですが、上條陽子の《女神》は、紙と板に青と黄、赤で、あつけらかなとした女神が描かれたパワフルな作品です。

彫刻は素材を味わう表現ともいえるでしょうか。特に本展示では、ブロンズ、鉄、ステンレスなどの無機物から、木材や漆など有機的な素材を用いたものまでご覧ください。有機的な素材で無機的な形態をあつかったり、無機的な素材で有機的なテーマを扱ったり、素材と形態とテーマについても考えさせられます。

版画では、なぜか心が和む四点の脇田和作品をはじめとする、八点を展示します。



岡村桂三郎 《伽楼羅07-2》

第6展示室

棚の美【近現代工芸】

11月11日(土)～12月17日(日) 会期中無休

「棚からぼた餅」のようなことわざ、「自分のことは棚に上げて…」といった慣用表現に登場するように、棚は古くから私たちの暮らしに身近な存在でした。奈良・正倉院には、松田権六《蓬萊之棚》と同じく、前後二方向から開くことのできる《黒柿両面厨子》が収められています。当時は仏具を収める目的ではないものも、厨子と呼んでいたようです。前後二方向に開くというのは、おそらく棚を部屋の中央に置き、両側から利用するための工夫でしょう。平安時代に寝殿造の建物が登場すると、寝殿に置くための二階棚、二階厨子があらわれ、棚がほかの調度品と同様、建築にあわせて変化してきたことが知られます。

その後、書院造に特徴的な作りつけの違い棚が用

いられるようになると、棚は収納という目的だけでなく、文具や花瓶などを見せるためのスペースとして、より自由な形式をとるようになりました。

棚の種類は、かたちによってのみ区別されるわけはありません。漆工、木工、竹工、そして金工など多様な工芸分野がかさなりあって作られています。今回の展示では、漆工と木工の作品をご紹介します。中でも二木成抱《蒔絵秋草図飾棚》は、蒔絵を二木成抱、塗りを砺波宗斎、金具を米沢弘安が手がけ、当代の石川県を代表する作家によって制作されたものです。展示時期は冬にさしかかっていますが、きょうで優美な風情をご覧くださいと思います。



松田権六 《蓬萊之棚》

十二月の企画展示室

第7～9展示室

第29回

志賀町を描く美術展金沢展

12月7日(木)～10日(日) 会期中無休
会期を通して午後5時で終了します

志賀町を描く美術展は、志賀町の四季を通して彩りを添える風景・豊かな自然の恩恵を受けて育まれてきた伝統文化や慣習などをキャンバスに描いていただくことにより、志賀町をより多くの皆様にPRする目的で開催しております。例年、招待作品から一般作品まで約一六五点の洋画・日本画・水墨画・水彩画などの作品を富来展と金沢展の二会場で展示しております。

◆入場料／無料

◆連絡先／志賀町生涯学習センター

羽咋郡志賀町高浜町カの一番地一

電話：〇七六七―三三―二九七〇

丹羽俊夫会長が石川県を基盤として創立し、今年四十一回展を迎えます。

理事長三宅厚史、副理事長今村文男をはじめ、県内外からの出品を中心に日本画一〇〇点余を展覧。また、新院展選抜金沢展に出品された秀作も多数展示致します。

◆主な出品者

松尾功一朗・伊藤夏子・中村勝代・大窪昭子・
牛丸美代子・北川真理子・北出朝之・保科誠・
柴田輝枝・村中博文・南好乃

◆入場無料

◆連絡先／丹羽俊夫

金沢市窪一―二二三

電話：〇七六一―二四四―五九一六

兵庫・神戸の書を楽しむ経済界の仲間約五十名が自己表現を楽しみました。

書への理解と知識を軸とし、今までの概念を取りの除き新しい線、表現を生みだし、言葉の意味を越えて、見えない色を、空気を、香りを感じて頂きたく、「創の書」書道しました。

三日間の短い時間ですが「温故知新」を心に、「楽笑創書」楽しんで頂きたく存じます。

◆入場無料

◆連絡先／高砂会 高砂京子

神戸市垂水区桃山台二―一八八―二三

電話：〇七八―七五三―〇三六九

第8・9展示室

第41回

公募日創展&新院展選抜金沢展

12月2日(土)～3日(日) 会期中無休

第8・9展示室

高砂流 創の書 第11回会員展

楽笑創書 らくしょう そうしょ

12月15日(金)～17日(日) 会期中無休

森羅万象をまとう —友禅 人間国宝 木村雨山・二塚長生の仕事—

平成30年1月4日(木)～2月12日(月・休) 会期中無休

今回は新春企画展「森羅万象をまとう」出品作から、木村雨山の代表作を一点紹介しましょう。昭和九年に制作された《縮緬地友禅花鳥文訪問着》(東京国立近代美術館蔵)。これは木村が初めて帝展で特選を受賞した作品です。

当初帝展の美術工芸部門における染織の入選作品は、東京美術学校図案科出身者による屏風やタピスリーなど、いわゆる平面の作品が大半を占めていました。木村も審査員を務めていた廣川松五郎に私淑しており、その影響を受けたアールヌーボー調のタピスリーや屏風などで入選を重ねていましたが、本作は帝展における着物作品で初の特選受賞です。加えて美術学校図案科出身者ではない、染織技術者として修練した作家によるものであったことで、後の職人たちの工芸作家への道を開いた作品とも言えるでしょう。後年、木村の元には工芸作家を志す多くの人々がジャンルを超えて、図案を片手に日参していました。余談ですが、現在蒔絵の人間国宝である中野孝一は、木村から厳しい批判を受けたことで図案を練り直し、日本伝統工芸展で初入選した《蒔絵やぶてまり箱》(当館蔵)が生まれたと語っています。

本作の受賞後、木村は昭和十二年帝展に《友禅游魚模様振袖》、昭和十三年文展に《麻地友禅瓜模様振袖》(二点とも当館蔵)を出品しましたが、わずか三年の間に一人の作家が制作したとは思えないほど作風が異なります。木村が持てる技術を駆使して制作した、この三点を本展では併せてご覧いただけます。



木村雨山 《縮緬地友禅花鳥文訪問着》
東京国立近代美術館蔵

展覧会回顧

燦めきの日本画

—石崎光瑤と京都の画家たち—

本展は、幼少期に金沢で学んだ石崎光瑤と、当時の京都画壇を紹介し、石崎光瑤や石川・京都の近代日本画について理解を深めて頂きたく企画しました。当初予定していた作品の出品交渉が難航したことを思い出します。それでも思いがけなく素晴らしい作品をお借りすることができたり、近代日本画史上の名作をお借りすることができたりと、大きな収穫がありました。その辺を少し紹介します。

石崎光瑤の代表作《燦雨》は、福光美術館を代表する名品でもあり、それをお借りすることが至上命題でした。同館からは、「大事な作品であるが、石崎光瑤の画業を知ってもらいたい」と快諾をいただきました。同名の上村松篁が描いた《燦雨》は、石崎光瑤の《燦雨》に憧れ、五十年の時を経て描かれた名品です。本作を奈良の松伯美術館よりお借りする際にも、「光瑤先生の《燦雨》が出品されるなら」とお返事をいただきました。しかし、この松伯美術館の《燦雨》は、特別スペースに常設展示されており、それを搬出することが技術的に困難をきわめました。「それでも借りたいと諦めない方だけお貸しすることにしていただきます」と後からお聞きしました。

また、土田麦僊《髪》や、村上華岳《二月の頃》など絵専卒業作品は、日本画史上に残る名作であり「よく出陳することができた」とのお声もいただきました。このほかにも、石川では目にすることがない多くの名作を展示することができ、会期中何度も足を運んでいただいたお客様もいらつしました。

こちらの無理難題にも快く応じていただきました関係各館に改めて深謝する次第です。



ミュージアムレポート

文化の森 ミュージアムウィーク

「子ども陶芸体験うつわづくり」「展示室でスケッチGO」

十月十五日、子ども陶芸体験「うつわづくり」を開催しました。この陶芸体験では、まず、「粘土となかよくなる」ことを目指してゲーム感覚で楽しめる活動を取り入れ、参加者も未就学児から小学生高学年までとなりました。触れる機会がほとんどない土粘土のひんやりした感触や、小さな子どもたちには、両手でもいっぱいなる程の粘土の塊を手にすることが初めての子どもが多かったのではないのでしょうか。粘土を高くしてみたり、蛇のように長く伸ばしてみたり、また、指先で模様をつけるなどしながら粘土造形をダイナミックに楽しみました。最後は力を込めて平らにのばした円盤状粘土を、片膝を立てた膝頭に載せて形を整えると、まさしく自分しかできない世界で一つだけのうつわの完成です。五色の釉薬から好きな色を選び、焼き上がりを待つのも楽しみな活動となりました。



十月九日・二十一日には、企画展関連事業としてミュージアムウィークの恒例イベント「展示室でスケッチGO!」が開催されました。今秋からこのイベントご参加の方は何名でご来館いただいても、展示室観覧料が団体料金に割引されることになりました。小中学生対象のスタンプラリー対象講座のため、子どもたちの活動だと思っていらいっしょの方も多いかもかもしれませんが、今回の二日間の開催で、一般の方の参加が急増しました。今後もこのイベント参加で、今までと違った展示室の楽しみ方を沢山の方に体験していただけたらと思っています。



十月九日・二十一日には、企画展関連事業としてミュージアムウィークの恒例イベント「展示室でスケッチGO!」が開催されました。今秋からこのイベントご参加の方は何名でご来館いただいても、展示室観覧料が団体料金に割引されることになりました。小中学生対象のスタンプラリー対象講座のため、子どもたちの活動だと思っていらいっしょの方も多いかもかもしれませんが、今回の二日間の開催で、一般の方の参加が急増しました。今後もこのイベント参加で、今までと違った展示室の楽しみ方を沢山の方に体験していただけたらと思っています。

12月の行事予定

■「工芸館名品展」関連行事 午後1時30分～ 美術館ホール 申込不要 聴講無料
講演会&ミュージアムコンサート

2日(土) 「ミニコンサート・制作者インタビュー」
「日本の近現代陶芸―歴史と鑑賞―」(午後2時～)
講師 金子賢治氏(茨城県陶芸美術館長)

■土曜講座 午後1時30分～ 美術館講義室 聴講無料

9日(土) 前田綱紀「百工比照」の思想 村瀬博春

16日(土) 百工比照の研究と新村撰吉 有賀 茜

※当初、十二月二日に予定されていた土曜講座「前田綱紀「百工比照」の思想」は、九日に移動しました。あしからずご了承ください。

ミュージアムレポート

石川県立美術館には、寄託作品も含め三二一点の脇田和作品が所蔵されています。公立美術館として、これほどの脇田作品をコレクションしている美術館は他にありません。この偉大な洋画家の作品をまとめて鑑賞できるのは、脇田美術館の季節開館と当館の特集展示だけです。

さて、ミュージアムショップには、脇田作品をあらわした素敵なグッズが用意されていることをご存知ですか? Tシャツやトートバッグ、マグカップなど、手元に置きたくなるような、愛らしくデザインされたグッズがお求め安く手に入ります。ミュージアムショップにぜひお立ち寄りください。



会期：平成30年1月4日(木)～2月12日(月・休) 会期中無休



1. 木村雨山 《染色楽園》
(シルク博物館蔵)



2. 木村雨山 《麻地友禅瓜模様振袖》
(石川県立美術館蔵)



3. 木村雨山 《友禅訪問着 松》
(日本伝染織振興会蔵)



4. 二塚長生 《友禅着物「瀑響」》
(文化庁蔵)



5. 二塚長生 《友禅着物「波動」》
(石川県立美術館蔵)



6. 二塚長生 《友禅訪問着「音しぶく」》
(式年遷宮記念神宮美術館蔵)

次回の展覧会

平成29年12月23日(土・祝)
～平成30年2月5日(月)
【12月29日(金)～1月3日(水)休館】

		前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室	ご利用案内 コレクション展観覧料 一般 360円(290円) 大学生 290円(230円) 高校生以下 無料 ※()内は団体料金 毎月第1月曜日はコレクション 展示室無料の日(12月は4日) 今月の開館時間 午前9:30～午後6:00 カフェ営業時間 午前10:00～午後7:00 年中無休 12月の休館日は 18日(月)～22日(金)、29日(金)～31日(日)
		新春優品選	新春優品選 【古美術】	
第3・4展示室	第5展示室	第6展示室	1F企画展示室	
新春優品選 【近現代絵画・彫刻】	新春優品選 【工芸】	書の魅力	森羅万象をまとう 平成30年1月4日(木) ～2月12日(月・休)	

「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか?

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、
県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った
知名度向上

県立美術館発行の
信頼度の高い広報媒体

お問い合わせ ☎ 092-716-1401

株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第410号(毎月発行)
2017年12月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL: <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>